

表紙にちなんで

橋 寺 知 子

なにわ大阪研究センター研究紀要の表紙は、本センターが所蔵する赤松麟作の版画集「大阪三十六景」を用いている。この版画集は1947（昭和22）年に発刊されたものだが、赤松が描いた大阪の情景は、戦前期の最も豊かで活気のあった頃の風景と推測される。ここでは、表紙にちなんで、風景に表れた大阪の近代をふりかえってみたい。

「大阪城」

表紙の絵は、大阪城公園南西部の大手門から大阪城天守閣の方向を望むもので、手前には大手門に至る坂道の両側の松、右手に多聞櫓、左手には千貫櫓、その間に本丸の大阪城天守閣が描かれている。大阪発の朝夕のニュース番組では大阪城のライブ映像が見られ、大阪城は大阪を代表する景観の一つだ。大阪といえば豊臣秀吉、秀吉が築いた大坂城、故に大阪城は大阪の象徴、なのだが、豊臣期の天守（1代目）は1585年に完成したが、1615年大坂夏の陣で焼失した。その後、徳川幕府は大坂城を大きく作りかえ^注、2代目天守は1626年に完成したものの、1665年に落雷で焼失、その後天守の再建はなかった。現在の建物は1931（昭和6）年に完成した3代目で、現在90歳、一番長寿の天守閣である。

1928（昭和3）年、大阪市長關一は昭和天皇即位の御大礼記念事業として、鉄骨鉄筋コンクリート構造での天守閣の復興と大阪城の一部公園化を発表した。1925年に大大阪記念博覧会が開催され、第2会場の大坂城では天守台に仮設された豊公館という展示・展望施設が大好評を博し、それをきっかけに天守閣の復興が企画されたという。豊臣期の大坂城の復元設計は容易ではなかった。設計は大阪市土木部建築課の技師たちで、姫路城など現存する城郭建築の実測といった基礎的な研究から始め、「大坂夏の陣図屏風（黒田屏風）」をもとに、様々な文献からの知見を加え、まとめ上げた。単なる復元にとどまらず、永久的な鉄骨鉄筋コンクリート構造で、エレベータも備えた最新の博物館である。近年は本格的な木造で復元を試みる城郭建築が多く、鉄筋コンクリート造の城郭は、何となくニセモノっぽく見られているように感じる。しかし大阪城天守閣は、考証を徹底的に行い、当時の最先端技術で建設に挑戦し、不燃で耐久性のある新しい「近代和風建築」を作ろうとした先

注）現在、外堀や内堀沿いの美しい石垣やいくつか残存する櫓は徳川期のもので、豊臣期の遺構は、実は地中に埋まっている。発掘によって豊臣期の石垣が発見されたのは1959年のことである。現在、豊臣石垣公開プロジェクトが進められ、寄付を募り、公開展示施設の建設が計画されている。<https://www.toyotomi-ishigaki.com/>



大手前から天守閣を望む



大阪城天守閣



旧第4師団司令部庁舎（ミライザ大阪城）

達たちの遺産であり、1997年に登録有形文化財に登録されている。

大阪城公園にはまとまった緑があり、川や濠の水も豊か、スポーツ施設や文化施設も充実した都市公園だが、ここまで拡大・整備されたのは戦後で、開園時は本丸のみが公園の範囲だった。終戦までは大阪城周辺は陸軍の一大拠点で、天守閣のすぐ南に天守閣と共に市民の寄付で建設された陸軍第4師団司令部庁舎（現・ミライザ大阪城）があり、二の丸にも陸軍施設がびっしり建ち並ぶ、緊張感ある公園だった。現在の公園東半分と大阪ビジネスパークのエリアは大阪砲兵工廠で、1945年の空襲で壊滅的な被害を受けた。近代の大阪は軍都でもあり、大阪城はその中枢であった。

また大阪城は上町台地の北端にあたる。大阪は平たい街だが、西から大阪城へ向かって歩くと、軽く上りになっているのに気づく。本丸の標高は31m程度あり、大阪市中心部で標高30mを超える地点は少なく、貴重な「高地」とであると言える。天守閣の東隣に水道の配水池がある。緑で覆われ、天守閣から眺めても池には見えないが、これは水道用水を本丸へ一旦揚水し、高さを利用して市中へ配水するもので、明治以来、水道事業に注力してきた大阪の近代遺産でもある。

上町台地には古代の遺跡も多い。大阪城公園の南では、発掘で難波宮跡が明らかにされつつあり、大阪城公園や大阪歴史博物館と連携した整備が計画されている。大阪城周辺には、大阪の古代から近代までの長い歴史が最も分厚く重層している。

（はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授）



周辺地図

